

## 死生の文化の変容

---

『現代宗教 2020』編集委員会

医療の発達や生活環境の改善により、平均寿命は伸び、長寿を享受できる人が増えた。また、がんのような病にかかっても日常生活を維持できるような科学技術や制度も整備されてきた。しかし、人間は死を免れることはできないという事実はまったく変わっていない。つまり、死とともに生きるという人間のあり方は変わっていない。しかし、どのように死とともに生きるかのあり方は変容している。そして、死生の文化の変容は宗教のあり方の変化とも深く関わっている。

20世紀の後半には「死を遠ざける文化」に対する疑問が投げかけられるようになった。かつては自宅の畳の上で死ぬ人が多かったが、ほとんどの人が病院で死ぬようになった。家庭では死を強く意識して生きていく人に接する機会が乏しくなり、死は医療と病院に囲い込まれる事柄になったかのような感じだった。また、死者を送り弔う文化は次第に疎遠なものになっていくように感じられ、新たな葬送や追悼のあり方も模索されるようになった。来世について語るものがしにくくなり、遺族にどのような声をかければよいのか、とまどう人も増えていくような感じだった。

しかし、他方で、新たに死に向き合う生き方、意識的に死とともに生きていく生き方が次第に広がってきているようだ。1967年にイギリスで聖クリストファーホスピスが始められ、ホスピスは世界に広がってきている。1980年代には日本の仏教界でもビハーラ活動が唱えられ、一定の広がりを見せるようになった。その頃には、日本でも死生観を問う

書物や、死生について語り合う集いが度々開かれるようになってきた。葬送や墓のあり方についても多様な考え方が表明されるようになる。新たに死に向き合い、自分なりの死生観をもとうとする動きも目立つようになった。

2011年3月の東日本大震災は、こうした動きを一段と明確にしたようだ。死者を追悼する文化について注目されるようになり、グリーフケアに対する関心も強まっていった。医療やケアに関わる仕事に携わる人々の間でも、死生観への関心が高まっている。また、こうした動きのなかで、宗教が果たす役割についても、より積極的に問われるようになってきている。臨床宗教師・臨床仏教師などの研修が進められ、資格認定も行われるようになってきている。自殺防止や自死遺族の集いにも宗教が積極的に取り組む動きがある。死に正面から向き合うには宗教の力が必要だという認識も広まってきているかに見える。

日本の事情について述べてきたが、世界各地の動向はどうだろうか。世界的にも死生学の動きはあり、火葬が増大する傾向があり、スピリチュアルケアやグリーフケアへの関心が広がっている。宗教ばなれが進んでいるようだが、他方で死生の文化においては宗教こそが大きな力をもつという考え方も強い。今回の特集では、以上のような現代の状況を踏まえ、「死生の文化の変容」についてさまざまな視角から捉えていきたい。

(文責：島蘭 進)